ボロブドゥール寺院の発意者は東大寺大仏を知っていたか

「蝶の雑記帳 85 付録」

「蝶の雑記帳 85」で、ボロブドゥール寺院を東大寺大仏と対照して、インドネシア・ジャワ島に日本列島と類似の「太陽の道」崇拝があったことを論証した。この付録では、本文「85」から派生する表題のような問いを話題にする。

本文の思索は、服部英二著『転生する文明』に刺激されて始まった。その書物は、大乗仏教とくに密教が、陸の道・シルクロードを通ってチベット・中国に伝わっただけでなく、古くから開かれていたインド洋と南シナ海をむすぶ海の道を航行して東南アジア・中国に入って行ったことを教えてくれる。それが日本にまでつながっていたことも、唐に渡った空海の名を挙げて語られている。インドネシア・ジャワ島に建てられたボロブドゥール寺院は、その密教の毘盧遮那仏を中心に置く曼荼羅を具象化した仏塔である。ところが、空海が日本に真言密教をもち帰ったのは平安時代のこと。奈良時代に建てられた東大寺は華厳宗で、その大仏は華厳経の毘盧遮那仏である。子細に言えば、両寺院の毘盧遮那仏は異なる宗派に属するのである。けれども、二つの寺院は 8 世紀おおよそ同時代に建造された。共鳴を引き起こすような因縁が何かあったのだろうか、思索をめぐらせてみよう。

東大寺の大仏は 745 年に鋳造が始まり 752 年に開眼法要が営まれた。大仏殿の完成は 758 年。当時世界最大級の木造建築金堂(大仏殿)の中で、滅金法で塗金された大仏は金色に輝いていた。他方のボロブドゥール寺院は、Wikipedia によれば、780 年ころから建設が始まり 792 年ころに一応の完成をみたが、824 年～833 年にも工事が行なわれたという。こちらは当時世界最大級の精巧を極めた石造寺院である。

ボロブドゥール寺院を建造したのは中部ジャワ島にあったシャイレーンドラ朝である。Wikipedia は、8 世紀半ばから 9 世紀前半まで栄え、のちにはスマトラ島に覇権が及び、インドシナ半島とも関係があった、と書いている。ところが、シュリーヴィジャヤ王国の記述では、逆に、シュリーヴィジャヤの王がジャワ島にシャイレーンドラ朝を建国した、と書く。両朝には血縁関係があったのだろう。しかし、まだ確立した歴史理解がないと見える。ここでは、『転生する文明』に倣って、シュリーヴィジャヤ王国は東南アジアに形成された連合的な王国だった、と解釈しておこう。ともかく、8 世紀半ばから 9 世紀前半まで、ボロブドゥール寺院のあるジャワ島中部を支配したのはシャイレーンドラ朝であった。

伸田浩三著「訶陵国号考」によれば、中国史書に、「訶陵」という国からの唐への遣使が貞観 14 年(640 年)から咸通年中(860～873 年)までに 12 回記録されている。地理の記述からすると、その国はインドネシアのジャワ島にあったらしい。

訶陵国からの遣唐使は 600 年代末にいったん途絶えて、768 年・769 年に再開されている。ちょうどシャイレーンドラ朝がジャワ島中部を支配下におさめた 8 世紀半ばのことである。813 年・815 年・818 年の記事には「献 僧祇」と書かれているから、仏教を信奉する国である。当時のインドネシアはおおよそヒンドゥー教に染まっていたことを考え合わせると、この時期に唐へ使節を派遣した仏教国「訶陵」とは、780 年から 833 年にかけてボロブドゥール寺院を建造したシャイレーンドラ朝としてまちがいないだろう。

さて、日本国が遣唐使を派遣したことは誰もが知っている。大仏が完成した年の 752 年にも遣唐使が唐に行っている。時は玄宗皇帝の時代。753 年正月、朝貢諸国の朝賀に出席した日本の大使藤原清河と副使吉備真備は、完成したばかりの金色に輝く大仏のことを唐の朝臣ばかりでなく諸国の使節に話さずにはおれなかっただろう。ところが、帰途、使節団の三隻の船のうち吉備真備の乗った船と僧鑑真の乗った船は日本に着いたが、大使と有名な阿倍仲麻呂の乗った船は難破して帰国できなかった。759 年、唐に残された大使藤原清河を迎えるためにまた使節が派遣された。安史の乱の混乱のさなかのことだが、今度は、758 年に完成した大仏殿のことが唐の朝臣との会話に出たにちがいない。このとき藤原清河の帰国の願いはかなえられず、彼と阿倍仲麻呂は、結局、終生中国に滞在することになり、亡くなったのは 770 年代に入っ

てからである。そうすると、唐の長安では、巨大な大仏殿に安置された金色の大仏のことが人々の口の端にのぼるほど知られていたと考えてよいだろう。

訶陵国すなわちシャイレーンドラ朝の遣唐使が行ったのは、それから十年ばかり経った 768 年･769 年のことである。日本国とジャワ島シャイレーンドラ朝の使節は同じ年に入唐することはなかった。しかし、上の段落で考えたことからすれば、768 年・769 年のシャイレーンドラ朝の使節が東大寺大仏殿と大仏のことを聞いた可能性がある。関心が強かったとすれば、藤原清河に会って話を聞くこともできたのである。シャイレーンドラ朝でボロブドゥール寺院を建設する構想が生まれたとき、日本国の東大寺と金色の毘盧遮那大仏のことを知っていた、と推測することが可能である。それが、太陽の道の霊場であるボロブドゥールの丘に、毘盧遮那仏＝大日如来のための壮大な寺院を建設することに刺激を与えた、と。

こうして、「ボロブドゥール寺院の発意者は東大寺大仏を知っていたか」という問いが開かれたテーマとしてあることが判る。インドネシアにこの問題を追究する史料が残っていないだろうか。

2019 年 9 月 30 日　　海蝶　谷川修